

新緑のまぶしい季節となりましたが、三井の晩鐘で知られる三井寺から琵琶湖疏水沿いに植えられた桜は多くの目を楽しませてくれます。

その琵琶湖疏水は、水の供給と水力発電を主とする近代の都市型疏水として、今から120年前の明治23（1890）年、田辺遼郎氏ら日本人技師だけで土木工事を完成させました。京都市へ安定した水の供給、水力発電の開始、物資の運搬など大きな役割を果たし、その発電電力は全国で初めて京都市内に市電を走らせ、東京への遷都により意気消沈していた京都市民を元気づけたことはよく知られています。今も現役で安定した水を京都へ供給しています。

そのルートを見ますと、大津市三保ヶ崎の琵琶湖畔で取水し三井寺のある長等山を抜けて、京都市山科区の上麓をめぐり、蹴上で分岐して本流は鴨川左岸に至り南下して宇治川に注いでいます。分岐した疏水は南禅寺境内から北白川に至っています。

蹴上付近には水力発電所や浄水場、インクライン（船を運ぶ施設）があり、南禅寺境内の水路閣は南禅寺の景観にとけ込み岡崎界隈の観光スポットとして有名です。北白川の疏水縁は哲学の道と呼ばれ市民に親しまれています。

工事は明治18年1月に政府の起工特許を得て、同年6月に長等山を抜く第一隧道（トンネル）から着手され、明治23年4月に竣工式が行われました。鴨川から伏見に至る運河は明治27年に完成しています。第一疏水完成までに動員された作業員は延べ400万人、使用煉瓦1400万個、セメント2万5000

0樽、ダイナマイト類70000貫目及び、総工費は当時の経費で125万円余りといわれています。

三保ヶ崎から伏見までは全長約20キ、北白川へは分岐して約3・3キあります。三保ヶ崎から蹴上までの約8・7キのうち約3・4キは隧道で、第一隧道（2436キ）が大津市に所在し、当時日本最長のトンネルでした。

第一隧道は東西両口から掘削されました。わが国初の試みとして途中に2カ所の堅坑を掘り、都合4カ所から掘り進み、3年半後の明治22年2月に貫通しています。第一堅坑は藤尾奥町から740キ入ったところに設け、地上から隧道までの深さは45・5キあります。明治18年8月に着手したものの掘り下げは1日平均21キの難工事であり、翌年4月ようやく到達しています。第二堅坑は深さ22・7キで第一堅坑より規模は小さく、空気の取り入れが主目的であったといわれています。

第一隧道の入口、第二隧道の出口、第三隧道の出入り口には西欧の古典的な個性ある建築様式の石造門が設置され、特に、第一入口門は古代ギリシャやローマの神殿を思わせるような意匠を凝らしています。そこには伊藤博文など当時の著名人による扁額が飾られ、第一隧道入口には伊藤博文の書になる「氣象萬千」の扁額があります。ところで、その第一入口門に鉄製扉があるのをご存じでしょうか。これは疏水の開削によ

琵琶湖疏水

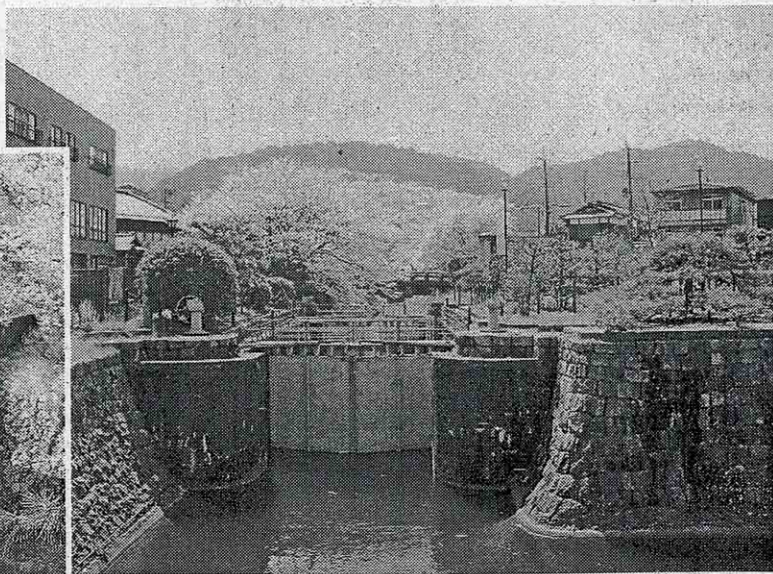
て琵琶湖の水が直接京都市に流れ出して大洪水が起るとか、反対に琵琶湖の水が涸れてしまうなどの反対運動があったようで、その対策として設けられたようですが、いまだかつて琵琶湖疏水が原因で洪水や枯渇したことはなく閉門されたことはありません。

それもそのはずで、琵琶湖南湖の標高は84キに対して蹴上はインクラインの頂上で78キと約8キの距離をわずか6キの比高差で流水するように設計されています。そこから岡崎動物園横の船だまりまで約30キ落下します。その落差を利用して明治24年に水力発電所が設けられ、

京都市内にチンチン電車を走らせたのです。現在ある煉瓦造りの建物は明治45年に第二期工事として建設され、今は使われていませんが横の建物で発電しています。

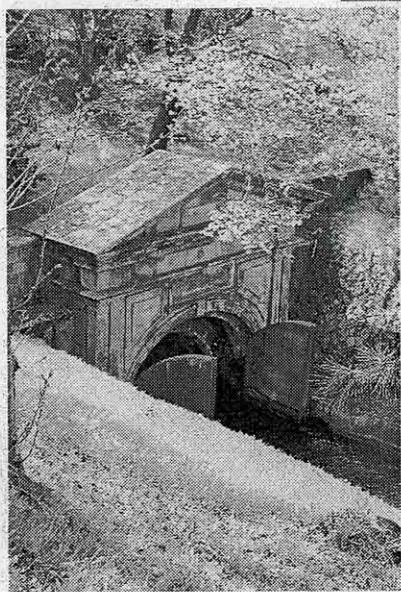
わが国が欧米諸国に追いつけとばかりに走り出した明治時代、日本人の技術力の高さを示し、産業振興として建設された琵琶湖疏水は今も現役として活躍し続けています。そして、近代化遺産であるとともに琵琶湖や京都の景観を形成する文化財として平成8（1996）年、国の史跡に指定されました。

（財団法人滋賀県文化財保護協会 葛野泰樹）



桜に彩られた琵琶湖疏水

第一入口門の鉄製扉



今も活躍続ける近代化遺産